

## 文化・芸術

綿トリ「ニット・コード」糸

ジャカード織物「籠織」(部分)

1982年

新井淳一 (1932~2017年)

「染織の本質はテクスチャーにあると信じている」

この信念通り、新井淳一は新たな質感・表情を持つ布を生み出そうと模索を続けます。そうした中で生み出されたのが、編んで作った「紐(ひも)」を織物の「糸」として使う、という斬新な発想でつくられた、こちらの作品です。

少し膨らんでいる細かい目の部分は木綿の糸で織られており、「紐」と「糸」が共に使われています。一見するとパッチワークかのように、異なる質感をもつこの布が、一枚の織物として織り出されているとは、驚きです。部分的に編み方を変えてつくる竹籠のような迫力を持つことから「籠織(かごおり)」と呼ばれています。この籠織の布を黒く染めて服に仕立てたものを、新井は生前、着用していたといいます。

新たな「布」を生み出すために素材や糸作りからこだわりを持って関わる、という新井の姿勢がうかがえる作品です。

(池田)

《名画の扉》

大川美術館企画展から

